

日本学術会議 北海道地区会議ニュース

発行 日本学術会議北海道地区会議

No. 54
2024-3

「北海道地区会議新代表幹事からのご挨拶」

第26期北海道地区会議代表幹事
(北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター教授)

宇山 智彦

このたび、北海道地区会議の第26期(2023年10月～2026年9月)代表幹事を務めることになりました。地区会議は、日本学術会議と科学者との意思疎通を図るとともに、地域社会の学術の振興に寄与することを目的としています。この目的に沿った使命を果たせるよう微力を尽くしますので、皆様のご指導とご協力をよろしくお願い申し上げます。

日本学術会議は、第二次世界大戦後の1949年、民主化と学術体制刷新の熱気の中で、茅誠司ら中堅世代の研究者の主導により、人類社会の福祉と学術の進歩に貢献することを使命として設立されました。また、あまり知られていませんが、日本学術会議には学術研究会議という前身があり、これは櫻井錠二らの主唱で、国際研究評議会への加盟と、国内の研究機関間の連絡・統一のために、1920年に設立されたものです。日本において、研究者の主導で設立・運営され、国内の研究者を統合し国際的に代表する国家機関の歴史は、百年以上にわたるのです。

日本学術会議は設立後、学問と学術行政のあり方を積極的に審議し、多数の研究所の設置や学術予算の拡充、国際学術交流の推進などに大きな役割を果たしました。その後、実質的な権限が弱められましたが、21世紀に入って社会と政府への科学的助言機能を強める自己改革を行い、多数の提言の発出など幅広い活動を行ってきました。

しかし今、日本学術会議は大きな岐路に立たされています。2020年10月の第25期の開始にあたり、6名の会員の任命が内閣総理大臣によって拒否されると

いう事件の後、同年12月に自由民主党が、学術会議を政府から切り離すよう提言しました。他方、学術会議は6名の会員の任命を粘り強く求めると同時に、社会的役割をよりよく発揮するための自主改革に取り組みました。その後内閣府が、会員選考に外部の諮問委員会を関与させることなどを盛り込んだ日本学術会議法改正案を準備したのに対し、学術会議は2023年4月の総会で、拙速な法改正をやめ開かれた協議の場を設けることを求めました。

すると内閣府は学術会議を法人化する方針を打ち出し、12人の有識者懇談会での検討を経て、2023年12月に、内閣府特命担当大臣決定「日本学術会議の法人化に向けて」が出されました。法人化の最終的な可否や細部は今後、法改正案の検討の中で決められていくと思われていますが、大臣決定では、選考助言委員会、運営助言委員会、監事、評価委員会などの設置が想定されています。研究者を内外に代表する機関(科学アカデミー)が、政府の主導によって非政府機関として設置され、外部から何重もの監督を受けるとするのは、日本と世界の学術史にない事態であり、これが学術会議と学術界全体にどのような影響を及ぼすのか、見通しは不透明です。

日本学術会議をめぐる状況を学問の自由の問題として語ることには、反発する方々もいるようです。確かに、個人の研究の自由が直接脅かされている状況ではないかもしれませんが、しかし、個人の研究の自由と並ぶ学問の自由の大きな柱は、研究教育機関や学界全体の自治・自律性であり、学術会議は学問の自律を支える役割を担っています。学問の自由に関する国際的な指標では、日本の学問の自由度の評価は他の先進国よりかなり低く、特に自律度の指数が低くなっています。学問の自律性の低さは、研究現場の実情に合わない学術政策によって個々の研究の発展が制約されることにもつながります。学術会議のあり方を、一組織の問題ではなく、日本の学問の自律の問題として、研究者・市民の間で幅広く議

例の講演を頂きました。また、カーボンニュートラル実現社会への期待や課題について、次世代をになう若い学生たちとともに考える機会としました。道内の高校生5チームを会場に招待し、それぞれ発表と講演者等との討論を行いました。高校生の発言と提言には多くの賞賛の声が寄せられ、シンポジウムは大変盛況でした。

また地区会議の独自の活動として、先端の科学における面白さや大切さを市民や小中学生・高校生等へ発信する「サイエンスカフェ」を長年実施しています。令和3年は加藤昌子先生（連携会員）による「色からはじまる変化のいろは—ソフトクリスタルにみる化学の新潮流—」、令和4年は河原純一郎先生（連携会員）による「気づける不思議、見逃す仕組み—認知心理学から広告を読み解く—」を開催しました。

私たちが直面しているSDGs、地球温暖化、パンデミック、カーボンニュートラル、地域紛争、地域災害、といった地球規模の諸課題を乗り越えるには、さらなる学術の深化と発展が不可欠です。国の立法、行政、司法の三権に対し、科学に立脚した学術面からのチェックや助言がますます重要となっています。日本学術会議はあらゆるものから公正で独立した立場が基本です。国の特別機関とした我が国の日本学術会議の制度は、世界に誇るべき良い見本です。政府は現在の組織体制を見直し、独立した法人とする方針を表明しています。日本学術会議ホームページ等から、今後の交渉過程を注視して頂きたいと思います。

第26期におきましても、北海道地区会議が学術の活発な地域活動を展開することになります。引き続きご協力とご支援を宜しく願います。

学術講演会開催報告

北海道地区会議では、市民公開の講演会を毎年開催しています。令和5年度は、11月18日（土）に、会場とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

以下に、当日の講演内容を報告します。

「人間と野生生物の共生のために —北海道の最新研究と実践—」

日時：令和5年11月18日（土）

場所：北海道大学学術交流会館（札幌市）

報告：日本学術会議連携会員

（北海道大学大学院獣医学研究院教授）

石塚 真由美

近年、ヒトの活動域と野生動物の生息域間において、「Human-Wildlife-Conflict (HWC)」すなわちヒトと野生動物の軋轢が問題となっています。全国的に、様々な動物との軋轢に関するニュースが毎日のように報道されています。このような状況の中、北海道には多くの大型野生動物が生息しており、他地域に比較しても北海道特有のHWC問題を抱えています。一方で、One Health若しくはOne Welfareは、ヒトだけの健康や福祉ではなく、野生動物を含む動物や環境の健康や福祉も一体のものとして考えるコンセプトです。HWC問題の解決には多角的な視野

での取り組みが必要となります。

本シンポジウムでは、北海道におけるHWCのフロンランナーに、北海道における野生動物課題と共生のための道筋について講演をしていただき、最新の情報を共有することを目的としました。このシンポジウムでは、ヒグマ、エゾシカ、ゼニガタアザラシ、トド、アライグマといった、北海道の中型～大型哺乳類を中心に、動物との軋轢がなぜ起っているのか、北海道においてどのような最先端な取り組みがなされているのかについて、各々の専門家にお話しいただきました。そして、One HealthやOne Welfareのコンセプトの元、HWC問題の解決のための大切な考え方について、共有しました。

日本学術会議北海道地区学術講演会
近年、ヒトの活動域と野生動物の生息域間において、「Human-Wildlife-Conflict (HWC)」すなわちヒトと野生動物の軋轢が問題となっています。北海道には多くの大型野生動物が生息しており、他地域に比較しても北海道特有のHWC問題を抱えています。一方で、One Health若しくはOne Welfareは、ヒトだけの健康や福祉ではなく、野生動物を含む動物や環境の健康や福祉も一体のものとして考えるコンセプトです。HWC問題の解決には多角的な視野での取り組みが必要となります。

**人間と野生生物の共生のために
—北海道の最新研究と実践—**

参加費無料 どなたでも参加いただけます

11月18日 2023年 11月18日 土 13:30~19:25
北海道大学学術交流会館 (札幌市中央区南一条西五丁目1番1号) ※Zoomウェビナーからも配信

プログラム
13:30~13:35 開会挨拶
13:30~14:00 講演1 『アトモの軋轢はなぜ増えているのか?』 野田 敏男 (山形大学大学院獣医学部 准教授)
14:00~14:25 講演2 『最新鋭な北海道の野生動物の生息域』 藤田 明 (旭川大学大学院獣医学部 准教授)
14:25~14:50 講演3 『アザラシの軋轢問題とは?』 小橋 芳男 (北海道大学大学院獣医学部 准教授)
14:50~15:25 講演4 『トドの軋轢を捉える(仮題)』 藤田 敏男 (旭川大学大学院獣医学部 准教授) / 野田 敏男 (山形大学大学院獣医学部 准教授) / 藤田 明 (旭川大学大学院獣医学部 准教授) / 小橋 芳男 (北海道大学大学院獣医学部 准教授)
15:25~15:50 講演5 『アライグマの軋轢』 藤田 明 (旭川大学大学院獣医学部 准教授) / 小橋 芳男 (北海道大学大学院獣医学部 准教授)
15:50~16:20 ハシメオラスカラン 藤田 明 (旭川大学大学院獣医学部 准教授)
16:20~16:25 閉会挨拶
16:25~17:00 懇話会 (札幌市中央区南一条西五丁目1番1号) ※Zoomウェビナーからも配信
17:00 散会 (山形大学大学院獣医学部 准教授)

主催：日本学術会議北海道地区会議、北海道大学

司会進行：渡辺 雅彦

(日本学術会議第二部会員、北海道大学
大学院医学研究院特任教授)

(1) 開会挨拶

13:30～13:35 開会挨拶

三枝 信子 (日本学術会議副会長・第三部会員、
国立研究開発法人国立環境研究所地
球システム領域領域長)

宇山 智彦 (日本学術会議第一部会員・北海道地
区会議代表幹事、北海道大学スラブ・
ユーラシア研究センター教授)

(2) 講演

13:35～14:00 「クマとの衝突はなぜ増えている
のか？」

坪田 敏男 (北海道大学大学院獣医学研究院教授)

14:00～14:25 「増え続ける北海道のシカとの共
生のために」

稲富 佳洋 (北海道立総合研究機構エネルギー・
環境・地質研究所自然環境部生物多
様性保全グループ・主査)

14:25～14:50 「ゼニガタアザラシの管理を考える」

小林 万里 (東京農業大学生物産業学部教授)

15:00～15:25 「トドの問題を探る」

磯野 岳臣 (水産研究・教育機構水産資源研究所
主任研究員)

15:25～15:50 「アライグマ問題の今後」

池田 透 (北海道大学大学院文学研究院 教授)

(3) パネルディスカッション

15:50～16:20

進行 石塚 真由美 (日本学術会議連携会員、北
海道大学大学院獣医学研究
院教授)

パネリスト 坪田 敏男、稲富 佳洋、小林 万
里、磯野 岳臣、池田 透

(4) 閉会挨拶

16:20～16:25 渡辺 雅彦

初めに、オンラインにて、三枝副会長よりご挨拶
をいただきました。次に、北海道地区会議の宇山代
表幹事に、講演会のテーマと現在の国内の状況につ
いて、ご説明をいただきました。



挨拶をする三枝 副会長 (オンラインでの参加)



挨拶をする宇山 代表幹事

最初のご講演では、昨今、国内で大きな課題となっ
ているクマとの軋轢について、長年ライフワークと
してクマの研究に取り組まれている北海道大学獣医
学研究院の坪田教授より、ご講演をいただきました。
クマの食性や生理、生態、そしてその調査方法
などの基本的な情報から、道内に生息するヒグマの
特徴についてご説明いただき、道内で大きな課題と
なっていたOSO18についても言及されました。近
年、国内でクマとのHWCが頻発している理由やそ
のメカニズム、必要な対策についてご説明をいた
だきました。



講演をする坪田 北海道大学教授

次に道内におけるエゾシカとのHWCについて、稲富 北海道立総合研究機構主査より、北海道で行っているモニタリングと個体数指数に基づくエゾシカの管理計画について説明頂きました。シカの採食によって、農業被害はもちろん、交通障害、森林構造や湿原植生にまで影響があることが報告されました。シカの有効活用や、市街地に出てくるアーバンディアの危険性についても話があり、最後にゾーニングの必要性についてまとめていただきました。



講演をする稲富 北海道立総合研究機構主査

アザラシの漁業問題については、もしかすると、他のHWC問題に比べて、これまで社会的な認知が進んでいなかったかもしれません。この講演会では以前より問題となっているアザラシによる漁業被害について、長年本課題を研究されている東京農工大学の小林教授よりご講演をいただきました。アザラシの調査方法やその行動、実際の被害、そして最後にアザラシがもたらす生態系の恩恵についても言及され、HWCをどのようにとらえていくべきか、広い視点でのお話をいただきました。



講演をする小林 東京農工大学生物産業学部教授

北海道特有のHWCの一つにトドが挙げられます。トドによる水産資源の被害に関して、磯野 水産研究・教育機構水産資源研究所主任研究員より、国内におけるトドの個体数の変化とその原因、道内のトドによる漁業被害について説明いただきました。漁業の「被害額」ではなく、「被害の軽減」が必要であること、適切な資源評価に基づく個体数調整が必要であること、生態系に基づく管理が必要であること等について説明いただきました。



講演をする磯野 水産研究・教育機構水産資源研究所主任研究員

最後に、現在、アライグマをはじめとして、国内で広域に拡大してしまった様々な外来種について、なぜ、生息域が広がってしまったのかその理由、対策の長期化の問題、根絶の難しさについて、基本的な説明を頂きました。また、外来種管理について、どのように考えていく必要があるのか、専門家としてのご意見を頂いた後、現在の国内のアライグマの状況と生息密度の考え方、合意形成の重要性、科学的知見に基づく対応、そして今後の対策について講演いただきました。新たな取り組みとして、新規に開発されたトラップについても紹介されました。



講演をする池田 北海道大学教授

講演時間が大幅に後ろ倒しになってしまったことから、残念ながら、パネルディスカッションについて十分な時間をとることができませんでしたが、会場やオンラインから非常に多くのご質問をいただき、各講演者にお答えいただきました。時間が限られていたため、すべてのご質問にお答えすることはできませんでしたが、質疑応答の最後に、参加者の皆様向けに、専門家の立場として、講演者から一言ずついただき、パネルディスカッションを終了しました。



質疑応答

本学術講演会の最後に当たり、北海道大学の渡辺特任教授より閉会のご挨拶をいただきました。今回の学術講演会には、現地会場より60名、オンラインで136名、計196名のご参加をいただきました。オンラインでは、北海道に限らず、全国からご参加いただき、この問題に対する社会的関心が非常に高いことがわかります。講演会は盛況のうちに終わり、ご登壇の皆様、そして熱心にご参加いただいた参加者の皆様に、心からの感謝を申し上げます。



質疑応答の進行をする石塚 教授



閉会挨拶をする渡辺 北海道大学特任教授

令和5年度実施の地区事業（実施分）

○学術講演会

令和5年11月18日（土）

北海道大学学術交流会館（札幌市）

「人間と野生生物の共生のために」

—北海道の最新研究と実践—

参加者196名（うちオンライン参加136名）

概要

◇司会 渡辺 雅彦

（日本学術会議第二部会員、北海道大学大学院医学
研究院特任教授）

◇挨拶

三枝 信子

（日本学術会議副会長・第三部会員、国立研究開発
法人国立環境研究所地球システム領域領域長）

宇山 智彦

（日本学術会議第一部会員・北海道地区会議代表
幹事、北海道大学スラブ・ユーラシア研究セン
ター教授）

◇講演

「クマとの衝突はなぜ増えているのか？」

坪田 敏男

（北海道大学大学院獣医学研究院教授）

「増え続ける北海道のシカとの共生のために」

稲富 佳洋

（北海道立総合研究機構エネルギー・環境・地質研
究所自然環境部生物多様性保全グループ・主査）

「ゼニガタアザラシの管理を考える」

小林 万里

（東京農業大学生物産業学部教授）

「トドの問題を探る」

磯野 岳臣

（水産研究・教育機構水産資源研究所主任研究員）

「アライグマ問題の今後」

池田 透

（北海道大学大学院文学研究院教授）

◇パネルディスカッション

進行 石塚 真由美

（日本学術会議連携会員、北海道大学大学院
獣医学研究院教授）パネリスト 坪田 敏男、稲富 佳洋、小林 万
里、磯野 岳臣、池田 透

◇挨拶 渡辺 雅彦

○北海道地区会議サイエンスカフェ

令和6年3月6日（水）

三省堂書店札幌店内 ブックス&カフェUCC

「血管研究の先に見えるもの」

講師 樋田 京子

（日本学術会議第二部会員、北海道大学大学院歯学
研究院 教授）

○北海道地区会議運営協議会

①令和5年5月29日（月）北海道大学（札幌市）

議題1 令和5年度日本学術会議北海道地区会議学
術講演会について議題2 日本学術会議サイエンスカフェの実施につ
いて

議題3 その他

②令和5年7月21日（金）（文書開催）

議題1 日本学術会議北海道地区会議学術講演会
「人間と野生生物の共生のために—北海道
の最新研究と実践—（仮題）」の開催につ
いて

③令和6年3月開催予定（文書開催）


議題1 令和6年度事業計画について


報告1 令和5年度日本学術会議北海道地区会議事
業実施報告について


北海道地区会議運営協議会委員紹介


第26期日本学術会議北海道地区会議の運営委員を紹介します。


氏名	宇山 智彦 (うやま ともしこ)	第一部会員 (北海道地区会議代表幹事)
	所属・職名	北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	地域研究委員会、地域研究社会連携分科会、民主主義の深化と退行に関する比較政治分科会など
	研究分野 (研究テーマ) 中央ユーラシア地域研究・イスラーム地域研究、中央アジア近代史・知識人史、ロシア帝国史・比較帝国史・民族問題史、中央アジア現代政治を中心とする比較政治、権威主義体制論、旧ソ連地域における国際関係と日本外交	
氏名	有村 博紀 (ありむら ひろき)	第三部会員
	所属・職名	北海道大学大学院情報科学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	情報学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 人工知能、機械学習、データマイニング、情報検索、および、それらに関するアルゴリズムの設計と解析	
氏名	河原 純一郎 (かわはら じゅんいちろう)	第一部会員
	所属・職名	北海道大学大学院文学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	こころの科学のキャリアパス構築分科会
	研究分野 (研究テーマ) 認知心理学 (注意、顔、視線、記憶)、心理学の産業応用 (広告、非注意・不注意)、法と心理学	
氏名	倉本 圭 (くらもと きよし)	第三部会員
	所属・職名	北海道大学大学院理学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	地球惑星科学委員会、地球惑星圏分科会、天文学・宇宙物理学分科会
	研究分野 (研究テーマ) 惑星科学 (原始太陽系円盤における物質進化、惑星・衛星の形成と進化、惑星大気の起源・進化・多様性、火星衛星探査計画MMX)	


氏名 玉腰 暁子 (たまこし あきこ)	第二部会員	
	所属・職名	北海道大学大学院医学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	健康・生活科学委員会、科学者委員会
	研究分野 (研究テーマ) 疫学、公衆衛生 (特に地域在住者を対象に、生活習慣と健康との関連を検討)	

氏名 樋田 京子 (ひだ きょうこ)	第二部会員	
	所属・職名	北海道大学大学院歯学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	歯学委員会、科学者委員会ジェンダー・エクイティ分科会委員、歯学委員会基礎系歯学分科会委員、歯学委員会病態系歯学分科会委員
	研究分野 (研究テーマ) 口腔医科学 (がん微小環境と口腔常在菌の関与) 実験病理学 (腫瘍、感染症における血管病態、免疫細胞との相互作用) 橋渡し病理学 (基礎研究成果の臨床検体での検証)	

氏名 美馬 のゆり (みま のゆり)	第一部会員	
	所属・職名	公立はこだて未来大学システム情報科学部・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	広報委員会、情報教育分科会、教育データ活用分科会、子どもの権利に関する分科会
	研究分野 (研究テーマ) 学習科学 (情報工学、教育学、認知心理学にまたがる分野)。 人がいかに学ぶかについての理解に基づいて、テクノロジーを使いつつ学習過程を支援する教材やツールの開発。近年はAIリテラシー向上のための教材開発。	

氏名 渡辺 雅彦 (わたなべ まさひこ)	第二部会員	
	所属・職名	北海道大学大学院医学研究院・特任教授
	所属委員会 (日本学術会議)	基礎医学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 神経解剖学 (シナプス伝達分子の発現と局在)、神経科学 (活動依存的なシナプス回路発達の分子細胞機構)	

氏名 石塚 真由美 (いしづか まゆみ)	連携会員	
	所属・職名	北海道大学大学院獣医学研究院・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	獣医学分科会、食の安全分科会、毒性学分科会、環境リスク分科会
	研究分野 (研究テーマ) 毒性学 (化学物質の生体内代謝と動態、化学物質感受性の動物種差の機序解明) 環境毒性学 (環境化学物質のフィールド調査、毒性メカニズム)	

氏名 庭山 聡美 (にわやま さとみ)	連携会員	
	所属・職名	室蘭工業大学大学院工学研究科しくみ解明系領域・教授
	所属委員会 (日本学術会議)	化学委員会、薬学委員会
	研究分野 (研究テーマ) 有機合成化学 (対称化合物の環境にやさしい非対称化反応の開発とその応用)、生物有機化学 (有機化合物を利用したタンパク質の定量法の開拓)	

第26期地区会議構成員

第26期北海道地区会議構成員は会員および連携会員で構成されている。

[会 員]

有村 博紀	第三部会員（北海道大学大学院情報科学研究所・教授）
宇山 智彦	第一部会員（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター・教授）
河原純一郎	第一部会員（北海道大学大学院文学研究所・教授）
倉本 圭	第三部会員（北海道大学大学院理学研究所・教授）
玉腰 暁子	第二部会員（北海道大学大学院医学研究所・教授）
樋田 京子	第二部会員（北海道大学大学院歯学研究所・教授）
美馬のゆり	第三部会員（公立はこだて未来大学システム情報科学部・教授）
渡辺 雅彦	第二部会員（北海道大学大学院医学研究所・特任教授）

[連携会員]

網塚 浩	北海道大学大学院理学研究所・教授
石塚真由美	北海道大学大学院獣医学研究所・教授
泉 典洋	北海道大学大学院工学研究所・教授
上田 佳代	北海道大学大学院医学研究所・教授
白杵 勲	札幌学院大学人文学部人間科学科・教授
内山 幸子	東海大学国際文化学部地域創造学科・教授
大野 宗一	北海道大学大学院工学研究所・教授
大場 雄介	北海道大学大学院医学研究所・教授
岡部 聡	北海道大学大学院工学研究所・教授
小川美香子	北海道大学大学院薬学研究所・教授
尾崎 一郎	北海道大学大学院法学研究科・教授
片桐 由喜	小樽商科大学・教授
加藤 重広	北海道大学大学院文学研究所・教授
菊地 優	北海道大学大学院工学研究所・教授
北 裕幸	北海道大学大学院情報科学研究所・教授

後藤 貴文	北海道大学北方生物圏フィールド科学センター・教授
齊藤 正彰	北海道大学大学院法学研究科・教授
櫻井 晃洋	札幌医科大学医学部遺伝医学・教授
迫田 義博	北海道大学大学院獣医学研究所・教授
笹木 敬司	北海道大学電子科学研究所・教授
佐藤 典宏	北海道大学病院病院長補佐/臨床研究開発センターセンター長・教授
澤村 正也	北海道大学大学院理学研究所・教授
信濃 卓郎	北海道大学大学院農学研究所・教授
清水真理子	国立研究開発法人土木研究所寒地土木研究所寒地農業基盤研究グループ資源保全チーム・主任研究員
相馬 雅代	北海道大学大学院理学研究所・准教授
高橋 素子	札幌医科大学医学部医化学講座・教授
武富 紹信	北海道大学大学院医学研究所・教授
田高 悦子	北海道大学大学院保健科学研究所・教授
俣野 茂	北海道大学大学院保健科学研究所・客員教授/北海道大学・名誉教授
田中 伸哉	北海道大学大学院医学研究所・教授
中小路久美代	公立はこだて未来大学システム情報科学部情報アーキテクチャ学科・教授
長野 克則	北海道大学大学院工学研究所・教授
西野 吉則	北海道大学電子科学研究所・教授
西村 正治	北海道呼吸器疾患研究所・理事長/豊水総合メディカルクリニック・医師/北海道大学・名誉教授
庭山 聡美	室蘭工業大学大学院工学研究科しくみ解明系領域・教授
野口 伸	北海道大学大学院農学研究所研究院長・教授
橋本 雄一	北海道大学大学院文学研究所・教授
長谷山美紀	北海道大学大学院情報科学研究所・教授
波多野隆介	北海道大学・名誉教授
平野 高司	北海道大学大学院農学研究所・教授
藤田 修	北海道大学大学院工学研究所・教授
藤田 知道	北海道大学大学院理学研究所・教授
藤山 文乃	北海道大学大学院医学研究所・教授
古屋 正人	北海道大学大学院理学研究所・教授
寶金 清博	国立大学法人北海道大学・総長
三浦 誠司	北海道大学大学院工学研究所・教授
南 雅文	北海道大学大学院薬学研究所・教授

見延庄士郎 北海道大学大学院理学研究院・教授
村井 祐一 北海道大学大学院工学研究院・教授
村上 正晃 北海道大学遺伝子病制御研究所・所
長・教授
村越 敬 北海道大学大学院理学研究院・教授
森本 淳子 北海道大学大学院農学研究院・准教授
山内 太郎 北海道大学大学院保健科学研究院・
教授/環境健康科学研究教育センター
センター長

(氏名は五十音順)

日本学術会議北海道地区会議事務局

北海道大学研究推進部研究振興企画課

〒060-0808 札幌市北区北8条西5丁目

電話 (011) 706-2155 F A X (011) 706-4873